表紙, 目次, 抄録, 雑報, 會報

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/37885

金澤醫學專門學校 十全會雜誌

第二十三卷
第參號
（第百四十六號）

大正七年三月一日發行

金澤醫學專門學校十全會

金澤醫學專門學校 十全會雜誌（第二十三卷第三號 第百四十六號）目次

○原著

○澤蟹ヲ中間宿主トスル新吸虫ノ學名決定……醫學博士 中川幸庵……一
○腎臓ノ代償性肥大ニ就テ……金澤醫學專門學校醫學士 岡部博……三
○大腸菌族ニ就テ……山中進一郎 丹忠一郎……二五

○抄録

內科學……二件……五一
醫化學……四件……五三
病理學……四件……五五
細菌學……二件……五八
外科學……四件……六〇
皮膚科學……四件……六三
眼科學……一件……六六

○雜報

●私立衛生會石川支會評議員會。●第二十回金澤皮膚科集談會。●第四十八回金澤病院醫事集談會例會。……六七

○校內消息

●紀元節拜賀式。●本學年試驗。●海軍省醫務局員の本校視察。●林教授學位受領祝賀會決算報告。……六八

○會報

●講話部例會記事。●遠足部記事。●十全會向毛支部會。……六八

○叙任及辭令

●陸軍省。●石川縣。……七一

○人事

●山元文吾氏。●岡山三郎氏。●吉井康治郎氏。●太田長作氏。●松村魁氏。●久保武氏。●波々伯部重隆氏。●黑田未次氏。●前川孝之氏。……七二

抄錄

內科學

○黃疸出血性スピロヘータ」病ノ相互免疫血清療法實驗

（臨床醫學第五年第二十四號）

石野寛吉

著者ハ先ヅ稻田博士等ノ黃疸出血性スピロヘータ病ノ馬免疫血清療法ヲ略叙シ、未ダ同病ノ完全ナル療法ナキノ故ヲ以テ、同病患者ノ血清ヲ相互ニ注射ヲ試ミテ得タル治驗例ヲ擧ゲタリ。

即著者ハ發病後九日及十六日ヲ經タルニ患者ノ血清ヲ互ニ交換シテ一回三—四竓宛、隔日又ハ三日ノ間隔ヲ以テ數回反覆皮下注射ヲナセルニ、心臟及脈搏ニ好影響ヲ及ボシ、尿中ノ蛋白質消失シ、黃疸ノ消褪早ク、大出血ヲ豫防シ得、且胃腸症狀其他ノ自覺症狀可良トナリ、全經過ヲ短縮セシメ尙ホ合併症ニ對シテモ好果アルヲ述ベタリ。

（內科學教室橋本抄）

○實地上簡便ニ行ハルル十二指腸蟲孵化診斷法ニ就テ

（兒科雜誌第二百十二號）

醫學士　藤井靜英

醫家ガ糞便ノ塗擦標本二、三ヲ檢シ十二指腸蟲卵ヲ見出サズ而モ臨牀上尙該蟲病ノ疑ヨリ自ラ免カレ能ハザル際ニハ次ノ方法最モ簡便ナリトシテ推奬ス即チ氏ハ糞便ノ拇指頭大（必要アラバ全量ヲ取ルモ可ナリ）ヲトリ木炭末中ニ轉廻セシメテハ輕ク壓スレバ炭末ハ糞質中ニ侵入シ糞便ヲシテ通氣性タラシムルト共ニ臭氣ハ炭末中ニ吸著セラレ無臭トナルベシ斯クシテ尙炭末ヲ周圍ニ壓著セシメテ團子ノ如キモノトナス或ハ團子狀トナラズシテ顆粒狀末トナルト雖モ尙可ナリ木炭量ハ糞便ノ二、三倍量ヲ可トス採取便硬カリシトキハ此外被炭末ニ一、二滴ノ水ヲ注加シ微ニ濕潤ナラシム軟便ナリシ時ハ炭末ハ三、四倍量ヲ加ヘテ混和ス之レ便ノ水分ヲ脫取シ適度ノ濕潤ヲ得ルト共ニ木炭ノ塩基物質ヲ以テ糞便ノ含有酸及醱酵ニヨリ生ズル有機酸ヲ中和スル爲メナリ指而以上ノ團子ハ「シャーレ」中ニテ作リ、次ニ濾過紙（吾人普通ニ使用スルモノ）ヲ四角ニ切リタルモノ（木炭糞塊ノ大小ニヨリ其大サヲ斟酌スベシ）ニ入レ折リ疊ムコト恰モ散藥ヲ包

裝スルガ如クス。包裝シ終ラバ普通ペトリー氏「シャーレ」ニ包裝ノ平滑ナル面ヲ上ニシテ入レ蓋ヲナシ冬期ナラバ一夜孵卵器內ニ置クカ「ストーブ」ノ近キ暖所ニ置クベシ夏時ナラバ日光ノ直射セザル暖所ニ置クコト一乃至二夜トス之ニテ卵ノ發育ハ行ハレ仔蟲ハ孵化シ來ルベシ。次ニ孵卵器或ハ暖所ヨリ取リ出シタル「シャーレ」ノ蓋ヲトリ包裝ヲ廻轉シテ平滑面ヲ下ニシ之ニ水道水或ハ煮沸冷却セル井水或ハ滅菌生理的食鹽水ヲ約十五乃至二十瓦入レ包裝紙ノ下面ヲ浸濕セシメ蓋ヲナシテ靜置ス仔蟲ハ十二時間乃至二十四時間ニシテ二晝夜孵卵器內ニ置カレタルモノニテハ三時間乃至十二時間ニシテ包裝外ノ水中ニ遊出シ初ムベシ而シテ仔蟲ヲ檢出スルニハ「ルーペ」或ハ顯微鏡ヲ用ユ。氏ノ結論トシテ

一、予ノ培養法ハ腸寄生蟲卵ノ孵化ニ應用シテ最モ清淨ナル仔蟲ヲ得ベク十二指腸蟲ノミナラズ「ストロンギロイデス」及「トリコストロンギールス」屬ノ研究ニモ應用サレ得ベシ。

二、十二指腸蟲ノ疑アルモノニ一二ノ糞便塗標本ニ蟲卵ヲ發見シ得ズンバ直ニ此法ヲ行ヒテ確診ノ根據トナスベシ。

三、此方法ニヨリ驅蟲療法ノ成功セシカ否カヲ判定スルヲ得ベシ。

四、貯藏法ハ尙充分滿足ナル方法ヲ發見セズ尙改良ノ餘地アリト雖モ先ヅ以テ研究室裡ノ一助トナシ得ンカ。

五、予ノ方法ハ先輩ノ方法ニ比シ簡便ニシテ且ツ清淨ナル仔蟲水ヲ得ベシ。

（小兒科教室橘抄）

醫化學

○井水（普通井）簡易消毒法

（京都醫學雜誌第十四卷第七號）

戸田正三
高津寄章

從來我國ニ於ケル掘井ハ其構造甚ダ粗雜ナルノミナラズ下水道ノ設備モ亦頗ル不完全ナルガ故ニ、國民衛生上誠ニ憂フベキモノアリ。著者茲ニ觀ル所アリ、次ニ掲グル簡易井水消毒法ヲ發表セリ。

井水一立方米ニ對シ約四瓦ノ漂白粉（一瓦ノ有効鹽素ヲ含有ス）ヲ投ジ、鈞瓶ヲ用ヒテ攪拌スレバ、既ニ半時間ニシテ腸系急性傳染病菌ヲ完全ニ撲滅スルヲ得。以上ノ處理ヲ施シタル水ハ五時間ヲ經レバ最早證明シ得ベキ遊離鹽素ヲ含マザルニモ拘ラズ、尙克ク殺菌力ヲ保有ス。

井水ガ若シ「アルカリ性反應ヲ呈スルコトアラバ漂白粉量ヲ倍加シテ八瓦トナスカ、或ハ井水一立方米ニ對シ漂白粉四瓦ト六五・一三〇・瓩ノ濃鹽酸トヲ混和スルヲ要ス。而モ此井水ハ前記處理ヲ施シツツアル間ニ於テモ尚能ク飲用ニ供スルヲ得。

（醫化學教室林田抄）

○養衆ノ研究補遺

（東京醫學會雜誌第三十一卷第二十號）

陸軍々醫學校衛生學教室
醫學博士　稲葉良太郎
上野俊昌

著者ハ各種ノ勞働者ニ對シ食物ノ攝取量ヲ概定スルコト及低廉ニシテ且養素ニ富メル食物ヲ給與スルコトヲ以テ多衆營養上緊要ナル問題トナシ、大正五年九月以降東京衛戍監獄ニ於ケル囚徒ニ就キテ食物ノ調査並ニ代謝試驗ヲ行ヒ、次ノ成績ヲ得タリ。

一、力業ニ服スル監獄囚徒ニ對スル每一日ノ給與額ハ、主食ニ於テハ精米四合二勺、精麥一合八勺、外賄料定額五錢四厘ナリ。若シ米麥量ヲ減ジタルトキハ其ノ代金ヲ副食物ニ轉用セリ。而シテ此調節ヲ施シタル副食物費ハ日額約六錢二厘、薪炭料六厘ナリ。九月二十日乃至二十九日ノ十日間ニ於ケル副食品種ハ朝、味噌汁（芋莖、若布、葱、馬鈴薯、白菜、南瓜）、晝、（鰹、鮪、鯡煮付、野菜六回、鱒、刻鰯、フライ、豚カツレツ、薩摩汁、煮付）、夜、（蔬菜、乾物煮付四回、豆腐料理三回、「キントン」一回、鯡煮付、馬鈴薯一回、鰊ノ子、芋莖一回）ニシテ價格朝食平均七厘八毛、晝食平均三錢九厘一毛、夕食平均一錢四厘六毛ナリ。而シテ其平均一日ノ養素量及熱量ハ次ノ如シ。

	窒素	蛋白	脂肪	含水炭素	熱量
主食（米麥六合）	一〇・二六	六四・一六	九・七五	五一六・八	二四七三
副食物	七・〇三	四三・九五	二四・九七	四〇・一七	五七七
計	一七・三二	一〇八・二二	三四・六七	五五六・九七	三〇五〇
內吸收量	二二・五九	七八・五九	二八・五〇	五五二・〇五	二八五〇

依是觀之、當監獄ハ囚徒ニ對シ糧食經理上周到ナル注意ト巧妙ナル運用トニ依リ、低廉ナル價格ヲ以テ比較的養價ニ富メル食物ヲ給與セリ。

二、中等度ノ勞働ヲ營ム强壯ナル男子（囚徒）ガ体質ノ均衡ヲ維持センガ爲メ、幾何量ノ主食ヲ攝取スベキカヲ檢索センガ爲、年齡二十三歲乃至二十八歲ノ强健ナル囚徒ニ對シ、夫レ夫レ六合食、五合食、四合食、三合食及前記ノ副食物ヲ給與シ、各十日間ニ亘リテ代謝試

驗ヲ施行シタルニ、四合食以下ノ主食量ヲ給與シタル場合ニ於テハ、体物質殊ニ体蛋白ノ損失ヲ免レザルモノノ如シ。

其他著者ハ最近十ケ年間ニ於ケル本邦米ノ生産額消費額並ニ主要農産物ノ収穫量ヲ調査シ、數百萬ノ大兵ヲ動カスニ當リテハ單ニ内國ニ産スル米麥量ノミヲ以テ滿足スベカラザルコトヲ警告シ、尙附録トシテ邦食ノ營養試驗成績、食品及食物ノ不吸収率、尿窒素量、食品ノ錢價等ノ研究成績表ヲ掲載セリ。

（醫化學教室竹内抄）

○喝病ノ本態並ニ原因ニ關スル實驗的研究（第一回報告）

（東京醫會雜誌第三十一卷第二十號）

陸軍々醫學校衛生學教室
醫學士　小泉親彦

著者ハ喝病ノ本態並ニ原因ニ關シ、家兎ニ就キテ實驗的研究ヲ遂ゲ、次ノ結果ヲ得タリ。

一、著者ハ温度、濕度ヲ異ニセル空氣中ニ在リテ窒素出納平均狀態ヲ保テル家兎ニ就キ、總窒素・「アモニア」・「カルシウム」・燐ノ代謝ヲ檢査シタルニ、体温上昇・呼吸頻數・食慾不振・下痢等ヲ看タルノミニシテ、蛋白分解並ニ「アンモニア」、「カルシウム」、燐ノ代謝ニハ著シキ影響ヲ認メズ。

二、數十日ノ長キニ亘リ、每日七乃至八時間、試驗動物ヲ三十乃至三十八度ノ氣温ニ接觸セシムルモ、血液ノ性狀ニ著シキ變化ナク、唯僅ニ其ノ「アルカリ度ヲ減ジ、粘度ノ增加ヲ觀ルニ過ギザルモ、氣温上昇シテ四十一度ニ達スレバ、微ニ赤血球ノ崩壞及溶血現象ヲ起スガ如シ。

三、普通温氣圈内ニ在ル試驗動物ノ劇働時ニ於ケル尿窒素分布狀態ヲ看ルニ、「アンモニア」量ハ常時ノソレニ比シテ六倍スルモ、動物ノ一般狀態ニハ變化ナク、唯微ニ發汗、体重ノ減少ヲ示セリ。然ルニ氣温ヲ高メテ三〇・—四〇・度トナシ、且ツ動物ヲシテ劇働セシムレバ、既ニ二時間ノ後ニ於テ過呼吸其他喝病ニ類似ノ徵候ヲ呈ス。又三五・度ノ氣中ニ於テ六時間中等度ニ勞働セシムレバ、呼吸淺表且ツ頻數トナリ、全身倦怠ノ狀ヲ呈シ、食慾減退且ツ下痢ヲ發シ、直腸内ニ於ケル温度ハ著シク上昇シテ四一度ヲ示スニ至ル。而シテ此際排泄セラルル尿素窒素ハ總窒素量ニ對シ僅ニ五六・%ナルニ反シ、「アンモニア窒素量ハ著シク增加シテ常時ノ二十倍量トナレリ。且ツ此ノ尿ハ著明ノ「アツェトン」、

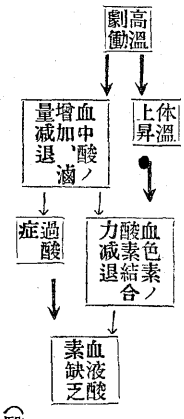
「アツェト醋酸ノ反應ヲ呈スルモ、而カモ總窒素出納ニハ著シキ變化ナシ。

四、高温氣圏内ニ於テ劇働スル動物血液ノ酸素及血色素間ニ存在スル平衡恒數ハ常時ノ即チ〇・〇〇〇二三二減少セリ。且ツ此際血中ニ於ケル水素イオン」ノ濃度ハ著シク增進シ、之レニ反シテ「アルカリ度ハ漸次減少シ、所謂過酸症ヲ呈セリ。

五、常態ニ於ケル血液酸素量ハ一四・五九%ナルモ、高温氣圏内劇働時ニ於ケル血液ノ酸素量ハ五・五八%甚ダシキハ一・二二%ニ降ルコトアリ。此酸素缺乏ニヨリテ乳酸・「β」オキシ酪酸、「アツェット醋酸等ヲ化生シ、加之之レト同時ニ一種不安定ナル酸ヲ發生スルモノノ如シ。

六、血色素ノ酸素結合力ガ高氣温、而カモ劇働時ニ於テ著シク減退スルハ、体温上昇及血液中ニ於ケル酸ノ發生從テ「アルカリ度ノ減少ニ基因ス。

七、著者ハ終リニ喝病發生ニ關シ、其原因、結果ヲ次ノ如ク圖說セリ。



（醫化學教室井上抄）

○種々ナル芳香体ノ冷血動物並ニ温血動物ノ血管ニ及ボス作用ニ就テ（附其化學的構造ト作用トノ比較研究）

（京都醫學會雜誌第十四卷第七號）

近藤清吾

著者ハ約三十種ノ芳香化合物ニ就キ、是ガ冷血動物並ニ温血動物ノ血管ニ及ボス作用並ニ其化學的構造ト作用トノ關係ヲ研索シ、次ノ結果ヲ得タリ。

一、「ベンツォール誘導体ノ作用ハ其溶液ノ濃度並ニ被作用動物ノ種類等ニヨリテ幾分差異アルモ、之レヲ概括スレバ血管ノ收縮並ニ擴張作用ニ歸セシムルヲ得。

二、此兩作用ハ主トシテ芳香体核ニ由來スルモ、之レニ連結セル原子簇ノ種類ニヨリテ多少ノ相違アリ。

（醫化學教室今井抄）

病理學

○經膚的ニ感染セル日本住血吸蟲ノ門脉系統ニ到ル主要移行徑路ニ就テ

（醫事新聞第九卷第八十九號）

東京帝國大學傳染病研究所

技師　醫學博士　宮川米次

技手　武本　榮

宿主体ニ感染セル日本住血吸蟲ノ皮膚ヨリ門脈系統ニ到ル主要移行徑路ニ關シテハ著者サキニ論ズル所アリシガ、今茲ニ種々ノ方向ヨリ研究ヲ重ネ斷定的ノ所見ヲ得タリトナシ追加スルニ尙幾多ノ新事實ヲ以テセリ。即チ述ベテ曰ク皮膚組織內ニ自働的ニ突破侵入セシ幼蟲ハ二ツノ徑路ヲ取リ右心ニ集ル即チ一ツハ淋巴間隙ヨリ毛細管ニ入リ靜脈ニ送ラレテ右心ニ達スルモノト一ツハ血管內ニ入ルコトナク淋巴腺ニ捕捉セラレ死滅スルモ之ヲ免カレシモノハ逃レテ胸部大淋巴管ニ達シ無名靜脈ニ入リ、靜脈血ト共ニ來リシモノト合スルモノ之ナリ。然シテ後者ニヨル場合極メテ少ナシ。

右心ヨリ肺臟內ニ集リ來レル日本住血吸蟲ハ左心ニ歸リ其ヨリ肝臟ニ達スルニハ主トシテ大循環系統ノ媒介ニヨリテ諸所ニ從テ亦消化管壁ニ栓塞シ毛細管ノ媒介ニヨリ腸間膜門脈系統內ニ達シ肝臟ニ送ラルルモノ最モ多シ。一小部分ニ於テハ肝動脈血ノ媒介ニヨリテ肝臟ニ送ラルルモノアリ。此ノ道ハ曩ニ大循環系統移行徑路トセシモノ即チ是ナリ。

（病理學教室服部抄）

○生理的並ビニ病理的狀態ニ於ケル輸卵管ノ形態學的研究（第一報告）

輸卵管粘膜ニ於ケル「グリコゲーン」ノ發現ニ就テ

（京都醫學雜誌第十五卷第一號）

京都醫科大學病理學教室　高　祖　敏　雅

胚細胞ノ輸送道ニシテ兼テ姙孕地タルノ外、輸卵管粘膜ニ於テハ特殊營養的機能ノ存在ヲ否定スベカラズトノ見地ヨリ此小機關ニ於ケル物質新陳代謝ノ研究ニ着手シ曩ニ之ガ吸收及排泄作用ニ就テ形態學的ニ檢鑒セシ著者ハ「グリコゲーン」問題ニ關スル成績ニツキテ論述セリ。

胎生、幼弱及成熟時ニ於ケル家兎ノ正常輸卵管粘膜上皮細胞ニハ他ノ圓柱上皮細胞ニ於ケルガ如ク「グリコゲーン」ヲ見ズ。唯姙娠時及產褥當初ニ於テノミ發現ス。著者ハ之ガ原因ヲ動脈性充血ニ歸シ更ニ實驗的「グリコゲーン」形成ニ成功セリ。即チ澱粉糊及「グリコゲーン」注入試驗ヨリ諸種油類、墨汁、酒石酸鐵加里液生理的食鹽水其他精液、卵巢、脾臟浸出液注入試驗ニ至ルマデ悉ク陽性ノ成績ヲ擧ゲ得タルガ更ニ指頭ヲ以テ輸卵管漿膜面ヲ摩擦シ或ハ溫湯ニ浸シタル「ガーゼ」ヲ之ニ接觸セシムル事等ニ依リテ容易ク「グリコゲーン」ヲ發現セシメ得タリ。此際粘膜面ニ一物質ヲ作用セシムル事夫レ自身ニ意

義アルニ非ズシテ、組織ノ充血コソ決定的價値ヲ有スルモノナル事ハ自家對照例ノ外ギールケ氏ノ實驗例ニ見ルモ明ナリト謂ヘリ。

（病理學教室垂水抄）

○章魚ノ體液中ニ寄生セル「ヂチエマ」ト二鰓類（頭足類）ノ體液細胞トノ生體染色ト「オキシダーゼ」反應ニ就キテ

（京都醫學雜誌第十五卷第一號）

醫學博士　清野謙次
醫學士　勝沼精藏

宿主体ニ生体染色ヲ施シ同時ニ寄生蟲ヲ染色セントスル企ハ著者等及中院氏ノ共同研究ニ依リテ始メテ成シ遂ゲラレタリ。章魚ノ体液ニ毎常寄生セル「ヂチエマ」ナル一種ノ「メソツォア」ハ「ツリバン青及「カルミン」ニヨル生体可染顆粒ヲ口腔周圍四個ノ特殊細胞ヲ除外セル外胚葉細胞ニ於テ抱有シ内胚葉細胞及體内「エムブリオ」中ニハ有セズ。「ヂメチール、バラフェニーレンヂアミン」ト「アルファ、ナフトール」ヲ以テセル「インドフェノール、ブラウ」合成法ニヨリテセル「オキシダーゼ」反應ヲ檢セルニ「ヂチエマ」ニ於テハ唯「ラビーレ、オキシダーゼ」ガ存在シ、「スタビーレ、オキシダーゼ」ヲ見ズ。「オキシダーゼ顆粒ハ外胚葉細胞内ニノミ存シ内胚葉細胞及「エムブリオ」ニ存セズ。口腔周圍ノ四個特殊細胞ハ生体染色ノ陰性ナルニ反シ「オキシダーゼ」反應强ク陽性ナルハ興味深シ。是中間動物ニ於テモ亦生体染色及「オキシダーゼ」ガ組織細胞ノ機能鑑別トシテ適用シ得可キコトヲ證スルモノナリ。次ニ著者等ハ章魚及烏賊ノ体液細胞ニ就キテ研究シ其生体染色陽性ナルノ故ヲ以テ之ヲ組織球ト思考スルハ可ナラズ、又「オキシダーゼ反應陽性ナルノ故ヲ以テ之ヲ骨髓性細胞ト思考スルハ當ラズ。體液細胞ハ其分化ノ度ニ於テ脊椎動物血球ノ前階級ニ在リトノ說ヲ爲セリ。

（理學教室船越抄）

○總輸膽管内ニ注入セシ異物ノ肝臟内沈着ニ就キテ

（京都醫學雜誌第十五卷第一號）

京都醫科大學病理學教室
醫學博士　清野謙次
醫學士　村上清

著者ハ家兎ヲ研究材料トシ其ノ前腹壁ヲ切開シ、總輸膽管ヲ露出結紮シ置キ其上部（肝臟ニ近キ部）ニ「リチオン、カルミン」墨汁等各種ノ液体ヲ注入シ以テ此等異物ノ肝

臓内沈着狀態ヲ研究シ左ノ如キ結果ヲ擧ゲタリ。

一、注入サレタル諸液ハ甚ダ短時間ニシテ家兎体内ニ吸収サル殊ニ「カルミン」ノ場合ニハ注入後一時間内外ニシテ全身諸所ノ粘膜ガ淡紅色ヲ表スコトアリ。

二、注入諸液体ハ管壁ヨリ吸収サルルコト微少ニシテ主ニ膽毛細管ヨリ竇周圍淋巴腔ニ移行ス是レ蓋シ主ニ鬱滯セル膽毛細管ガ淋巴腔内ニ機能的破裂ヲ起スニ因ルモノニシテ此破裂ハ截片染色ニヨリテ認メ得ルヨリモ甚ダ早期ニ生ズルモノトス。

三、肝組織内ニ吸収セラレタル此等異物ハ先ヅ膽汁組成分ト共ニ組織球性細胞ニ攝取セラレ。然レドモ異物量増加シ該細胞ノ攝取量ヲ超過スル時ハ異物ハ淋巴液或ハ血液中ニ移行スルモノトス。（病理學教室狩野抄）

細菌學

○中耳炎ノ自家ワクシン」療法

（細菌學雜誌第二卷第六十八號）

田中達三郎

著者ハ中耳炎患者四十二例ニ就テ自家ワクシン」療法ヲ行ヒ結論シテ曰ク、

一、自家ワクシン」ハ中耳炎ノ特殊療法ニシテ早期ニ用ユル程速効ヲ奏ス。從テ根治手術ヲ要スベキ危險症ヲ大ニ減少ス。

二、注射量ハ成人ニハ一c.c.一mgノモノ初回〇・二五c.c.ヨリ初メ隔日次回ヨリ〇・二五c.c.ヲ増加シ一・〇c.c.ニ達スレバ反覆ス但シ小兒ハ成人ノ三分ノ一乃至四分ノ一量ヲ用フ。

三、「ワクシン」ハ新骨竇（特ニ小聽骨病竇）ニ對シテモ著シキ治効アリ、是レ自家ワクシン」ノ有効ナル所以ナリ但シ腐骨又ハ眞珠腫等アルモノニハ根治手術ヲ施サ事ザルベカラズト雖モ自家ワクシン」療法ハ根治手術ノ後療法ニ向テモ良好ナル經過ヲ執ラシム。

四、自家ワクシン」ノ早期療法ハ鼓膜ノ穿孔（特ニシュラープネル氏膜ノ穿孔ト雖モ）ヲ瘢痕ヲ貽スコトナクシテ治癒シ鼓膜ハ再ビ眞珠腫樣光澤ヲ放チ聽力ヲ本復ス。

五、「ワクシン」療法ハ啻ニ耳科的處置ノ最モ困難トスル小兒ニ向テ便益ナルノミナラズ其奏効ハ成人ニ比シ迅速ナリ。

附記自家ワクシン」製法、外聽道内ヲ三％過酸化水素水（十倍稀缺液）ニテ拭ヒ更ニ硼酸アルコホール」ヲ以

テ可及的無菌ナラシメ滅菌小捲綿子ヲ以テ中耳ノ分泌物ヲ注意シテ拭ヒ之レヲ可檢材料トナシ法ノ如ク分離培養ヲ行フ。製法一c.c.ノ生理的食鹽水ニテ一mgノ菌浮遊液ヲ造リ之レヲ六十度ニ三十分間重湯煎ニテ加濕シ○.五%ノ割ニ石炭酸水ヲ加フ、之レヲ成人用注射液トナシ小兒ニハ成人ノ三分ノ一乃至四分ノ一ヲ用フ。

○肺炎雙球菌ノ研究

（細菌學雜誌第二百六十八號）

高野六郎
田中達三郎

著者等ハ肺炎患者及近時本邦ニ流行スル傳染性感冒患者等ヨリ得タル所謂肺炎雙球菌ヲ研究資料トナシテ攻究シ次ノ結論ヲ下セリ。

一、肺炎雙球菌ハ其ノ形態培養病原免疫ノ性狀頗ル變動シ易ク定型的ノ性狀ヲ見ザルモノ甚ダ多シ。

二、形態上ニ於テハ「グラム陽性ノ雙球菌ヲ失フコトナキモ球菌ノ形ハ時ニ變態ヲ呈シ、雙球菌連ナリテ長鎖ヲナシ時ニ膽汁ニ溶解セラレザルニ至ル。

三、培養上ニ於テハ概シテ多少ノ溶血作用ヲ呈シ稀レニハ「イヌリン」ヲ分解セザルモノアリ。加温血液寒天上ニ多クハ綠色ノ「コロニー」ヲ作ルモ强弱ノ差アリ。

四、病原作用ニ於テハ正規ノ肺炎ヲ起ス外ニ流行性感冒ノ原因トナリ、其他上氣道一般ヲ犯ス、健康鼻口腔ニモ存ス、又動物ニ對スル菌力ニモ差アリ。

五、免疫反應モ凡テノ菌ヲ一貫セルハ獨リ補体結合試驗ノミニシテ如何ナル變態ノ菌ニモ共通ナルノミナラズ種々ノ性狀ニ於テ局端ニ立ツ粘液性肺炎雙球菌ニモ共通スルモノナリ故ニ肺炎菌ノ判定ヲナスニハ補体結合反應ヲ用フベシ。

六、凝集反應ト感染防禦作用トハ必ズシモ平行セズ、此ノ兩反應ハ近親ノ菌種間ニ於テノミ共通スルモノナリ。

七、凝集反應及防禦作用ヲ以テ肺炎菌ヲ截然分類スルハ困難ナリ。

八、本邦ノ肺炎菌ヲ米國ノ方式ニ分類スル能ハズ相互ニ類移行スル菌集團中ニ免疫關係近親ノ菌ガ比較的多ク存シ其菌ハ米國ノ第一型ニ類似スルヲ見ル。

九、本邦ニモ粘液性肺炎菌アリ肺炎ノ原因トナリ或ハ感冒ノ原因ヲナスモ必ズシモ重症ノ肺炎ノミヲ起スニ非ズ。

十、粘液性肺炎菌ノ免疫上ノ關係ハ特殊ニシテ受働性免

疫ヲ證セズ從ツテ血清療法ヲ行フコト能ハズ補体結合試驗ニ依ルニ本菌ハ連鎖菌ニ屬セズシテ肺炎菌ニ屬スベキモノナリ。

十一、肺炎ノ血清療法ハ多價血清ヲ以テ適當ナリト信ズ、余等ノ多價血清ハ米國ノ第一型及第二型ヲ救フノミナラズ日常遭遇スル悉クノ肺炎菌ニ有効ナルヲ動物試驗ニテ確カムルヲ得タリ。

十二、肺炎ノ血清療法ノ眞價ハ更ニ臨床上ノ實驗ニヨリテ決定セザルベカラズ、肺炎血清療法ノ研究ニ當リ最モ必要ナル事項ハ應用セル治療血清ト患者ノ菌種間ノ免疫上ノ關係ナリ、此ノ關係ヲ明ニシ更ニ其ノ血清ノ强サヲ定メ用量、注射法及時期ヲ考秤シテ始メテ治療血清ノ効果ヲ論ズベキモノトス。

十三、動物實驗上ノ成績ハ此種抗菌性血清ニアリテハ直チニ臨床上ノ効價ニ推論スルヲ許サズ。

（以上二件細菌學教室清水抄）

外科學

○瘻管ノ療法ニ就テ

（實驗醫報第四年第三十九號）

小島浦三郎

盲腸炎又ハ膿胸ノ手術後等ニ瘻管ヲ遺シ、再手術ヲ勸ムル勇ナク又患者モ之ヲ欲セズシテ荏苒治セズ困却スル場合ニ當リテ、之ヲ簡單ニ治癒セシムルハ臨床家ノ最必要トスル所ナリ。著者ハ從來試用セル方法ノ二三ヲ紹介セリ。

一、沃度仿謨グリスリン」ノ十ト一トノ乳劑ヲ瘻管內ヘ反復注入スルコトニヨリ屢〻瘻孔ヲ治癒セシメウルコトアリ。

二、沃度加フェノール カンフル」ノ注入。クルムスキー氏液（カンフル六〇・〇石炭酸三〇・〇無水酒精一〇・〇）ノ九分ト沃度丁幾一・〇ヲ加ヘテ製シタル暗褐色液ニテ、之ヲ「スポイト」又ハ注射器ニ充テ中等壓力ヲ以テ瘻管內ヘ反復注入シ「ガーゼ」ヲ壓貼シテ繃帶ス、此液ハ從來屢〻「フレグモーネ」、丹毒、「フルンケル」等ニ塗布シテ偉効ヲ奏シタルコトアリ。

三、ベック氏「ビスミットパスタ」（「ビスミット」一、「ワゼリン」二ノ此例）、ヲ大注射器內ニ充塡シ、其先端ニ消息子ノ中空ナル管狀嘴管ヲ接合シ、瘻管ノ底部ニ送リ强壓ヲ加ヘテ「パスタ」ヲ瘻管內ニ反復充塡ス、又淺キ瘻管ハ直接ニ「スポイト」ヲ以テ注入スルモ可ナリ、淺在瘻管ハ殊ニ著効アリ。

四、前三法ヲ用ヒテ効ナキ場合ニX線ニヨリ治癒スルコトアリトテX線ヲ用ヒテ著効ヲ奏セル三例ヲ記載セリ。

○急性關節炎ノ固定療法

（實驗醫報第四年第四十號）

醫學博士　佐藤清一郎

急性關節炎殊ニ淋毒性ノ場合ニ於ケルガ如キ激痛ヲ伴フ關節炎ノ療法ハ種々アレド臨床上速効ヲ奏スルモノナシ、本疾患ニ於テ治療上最モ困難ヲ感ズルハ激烈ナル疼痛ノ處置ニシテ吾人ハ第一ニ此疼痛ヲ輕減シ得ル療法ヲ選バザルベカラズ。此目的ヲ以テ著者ハ淋毒性關節炎ニ從來閑却サレ居タル副木或ハ「ギブス繃帶ヲ以テスル固定療法ヲ最近經驗シ良好ナル經過ヲトリタル四例ヲ報告セリ。而シテ「ギブス繃帶ハ關節ノ安靜ノ目的ニ向ツテハ理想的ノ方法ニシテ短時日ノ應用ニ際シテハ關節ニ强直ヲ殘スコトナシ。之ニヨリ即刻ニ疼痛ハ輕減セラレ、熟睡ヲ得且ツ下熱スル場合多シ。又「ワクシン」注射療法ノ効ナキ場合ニ本法ヲ用ヒテ多クハ著効ヲ奏ス。「ギブス繃帶ノカケ方ハ可成的薄クカケ重量ノタメ患部ニ苦痛ヲ與ヘザルヲ要ス。患部ノ腫脹甚シキ時ハ隨時局所ヲ觀察シウル樣、最モ壓痛アル部分ヲ有窓トナシ置クヲ良シトス。「ギブス繃帶解除ノ時期ハ疼痛、發熱等主ナル症狀ノ消失シタル後ニシテ唯餘リ永ク關節ヲ固定シ置キテ、之ガタメ强度ノ强直ヲ殘スコトヲ避クルニアリ。著者ハ通常二週間以内ニ解除シテ副木ニ代ヘ罨法ヲ施シ、逐次「マッサージ療法ニ移ルト云フ。

○丹毒ニ就テ

（臨牀醫學第六年第一號）

和田英太郎

著者ハ大阪回生病院外科ニ於テ最近三ケ年間ニ治療シタル丹毒患者四十名ニ付キテ次ノ如ク述ベタリ。

四十名ノ患者中三名ヲ除クノ他ハ悉ク創傷ヲ有シ、内十七名ハ粗大ノ創傷、二十名ハ細小ノ創傷ニシテ、更ニ之ヲ細別スレバ頭部六名、顏面十三名、軀幹七名、上肢九名ナリ、男女別ハ男二十一名、女十九名ニシテ體質ノ佳良ナルモノ九名、中等ナルモノ二十八名、不良ノモノ三名アリ、年齡ニ就テハ二十一歲以上四十歲以下ノ活動時代ノモノニ最モ多ク、生後一歲未滿ノモノ之ニ亞グ、一歲未滿ノ哺乳兒ニ比較的多數ナルハ糜爛濕疹等ニ罹リ易キト、皮膚軟弱ニシテ抵抗力ノ乏シキトニ因ルナルベ

シ。發病時期ハ四月最モ多ク、九月三月等之ニ次グ。

症狀　潛伏期ハ甚短クシテ數時間乃至數十時間後惡寒戰慄ノ下ニ發熱シ稀ニ四十度ヲ超ユ、皮膚ノ腫脹ハ皮膚ノ固定ト反比例シ、眼瞼、口脣、手背等ニ最モ强ク、疼痛ハ頭皮ニ於テ最モ著シ、蔓延ノ方向ハ縱徑ニ沿フモノ最モ多ク、島嶼狀ノモノ最モ少シ、蔓延ノ速度ハ早キモノハ一晝夜ニ一五乃至二〇糎ヲ算スルモ多クハ一〇糎ヲ出デズ。患者ノ約四分ノ一ニ於テ水疱ヲ實驗、皮下脂肪僅微ニシテ延展性少ナキ部、即頭皮、指尖等ニ壞死性丹毒ヲ認メタリ。又蔓延ノ廣狹遲速ヲ調査セシニ速ニシテ廣キモノ十八名、速ニシテ狹キモノ六名、遲クシテ廣キモノ七名、遲クシテ狹キモノ九名ナリ。併發症ハ壞疽二例、膿瘍一例、腦膜炎一例合計四例、一〇%ヲ認メタリ。死亡率ハ四十例中一例(二·五%)ニシテ五ケ月ノ哺乳兒ノ腦膜炎ヲ併發セルモノナリキ。

療法　局所療法トシテハ先ヅ等分「イヒチオールラノリン」ヲ肉眼的罹患部ヨリ少ナクトモ尙一〇糎以上廣ク健康部ヨリ患部ニ向ツテ之ヲ塗布シ、亞麻仁油紙ヲ貼用シ其上ニ二%硼酸水ノ罨法ヲ行フ。時トシテハ氷罨法ヲ加フルコトアリ。而シテ必要ナキ限リ、一旦塗布シタル部位ハ其儘放置シ、患部ノ刺戟ヲ避クルヲ良トス。翌日若シ病熱其封鎖線ヲ突破セル時ハ更ニ其部及隣接セル健康部ニ廣リ軟膏ヲ塗布ス。

尙「クロールカルシウム」液ノ靜脈內注射ハ著者ノ實驗ニヨレバ注射後下熱スルコト多キハ事實ナルモ、一回乃至二三回ノ注射ニヨリ病勢ヲ頓挫セシムルコトハ不可能ニシテ、數回反復スレバ其蔓延ヲ抑制シ、經過ヲ短縮セシムル効力アルガ如シ。然レドモ其効力ヲ確定スルニハ尙多數ノ症例ニ就テ十分覆査スルヲ要スト。

○乳糜性腸間膜囊腫ニ原因セル小腸「イレウス」ノ治驗

(臨牀醫學第六年第一號)

醫學博士　杉　寛一郎

腸間膜囊腫ハ稀有ナルモノニアラザルモ、該囊腫ニ基因セル腸閉塞ノ症例ハ甚ダ僅少ニシテ本邦ニアリテハ未ダ其報告例ヲ聞カズ。著者ノ實驗例ハ六歲ノ女兒ニシテ生來虛弱、約一ケ年前ヨリ月ニ二三回發作性ノ下腹痛ヲ訴ヘ自然ニ治癒スルヲ常トセリ、約十日前ヨリ時々臍部ニ限局セル發作性腹痛アリ、手術ノ二日前ノ午後八時突然劇烈ナル腹痛ヲ發シ發熱ヲ伴ヘリ。手術當日モ腹痛止マズ嘔吐頻發、吐物ハ綠青色ノ液ニシテ糞臭ナシ。初メ灌

腸ニヨリ少許ノ糞塊ヲ排出セルノミニテ其後ハ更ニ排便ナシ。腹部ハ一般ニ膨滿シ臍部ニ於テノミ輕度ノ隆起ヲ認ム、該腫瘤ハ圓形ニシテ大サ約夏蜜柑大、表面平滑、軟クシテ波動ヲ呈シ限局ス濁音ヲ呈シ多少移動スルモノノ如シ。手術ニヨリ露出セル囊腫ハ腸間膜兩板ノ間ニアリテ瓢簞形ヲナシ其絞扼部ノ前面ニ於テ小腸ハ帶狀ニ横走ス、囊腫壁ノ一例ハ腸間膜附着部ニ於テ小腸壁ト相接シ該小腸壁ハ囊腫ニヨリ著ク壓迫且牽引セラレテ長サ約七糎ノ間ハ鬱血ヲ呈シオレリ。囊腫ハ容易ニ剝離剔出スルヲ得タリ。囊壁ハ紛失セルタメ鏡檢シ得ザリシモ、內容ハ帶黃白色乳糜樣液ニシテ多數ノ「コレステアリン」板、脂肪顆粒及少許ノ二重屈折性脂肪質ヲ證明セリ。術後經過佳良ニシテ二十日位ニシテ退院セリ。腸間膜囊腫ノ發生部位ニ就テハ諸家各其說ヲ異ニス。ペアン氏ハ腹膜後部ノ臟器ニ原發シ遂ニ腸間膜兩板間ニ向ヒテ增大セルモノナリトスルモ本例ニアリテハ囊腫ハ腸間膜內ニ位シ一部ハ腸管漿膜下組織ト癒着セルモ腸間膜根並ニ腹膜後部組織トハ遠ク隔離セル點ヨリ考フルトキハウニルト氏ノ說ノ如ク腸間膜ニ原發シタルモノニシテ、患者ノ訴ヘシ腸閉塞症狀ハ該囊腫ガ次第ニ增大スルト共ニ腸管ヲ直接ニ壓迫牽引シテ其狹窄ヲ來シ遂ニ閉塞ヲ惹起セルモノナラントテ腸間膜囊腫ノ症狀、診斷及療法ヲ記載セリ。

（以上四件外科學教室高森抄）

皮膚科學

○稀有ナル陰囊肉腫ノ一例

（日本泌尿器病學會雜誌第六卷第四號）

醫學士　井尻辰之助

著者ハ陰囊ニ發生スル腫瘍中極メテ稀有ナル肉腫ノ一例ヲ實驗セリ。

患者ハ六十一歲ノ男ニテ農ヲ業トシ血族ニ惡性腫瘍ノ遺傳ヲ證明セズ生來健全ニテ著患ヲ知ラザリシモ約十六年前ニ陰囊ノ下端ニ近キ皮下ニ米粒大ノ「カタマリ」ノ發生セルニ氣附ケリ然シテ其後約十ケ年間ニ漸次增大シテ拇指頭大トナレルモ自覺症狀ナク周圍組織トノ癒着ハ全ク缺如シ能ク皮下ニ移動シ其後餘リ變化ナカリシモ昨年三月頃急ニ生長ヲ初メ約一ケ月間ニ雞卵大トナリ皮膚ト移動シ難キニ至レリ患者ハ賣藥「すいだし膏藥」ヲ貼用シテ此ヲ破潰セシメタルニ一時小サクナリ小康ヲ得タルモ昨年秋頃ヨリ急速ナル增大ヲ始メ本年一月ヨリ三月ノ間ニ大人手拳ノ二倍大トナリ自覺的ニハ二ケ月前ヨリ刺痛ア

リタルモ數日來此ヲ覺エズ近來午後ニ三十八九度ノ發熱アリテ常ニ鈍痛アリ食思減退漸次衰弱スト云フ。

現症トシテ身體短矮シテ削瘦シ貧血性ニテ陰囊右側ノ下端ニ近ク直徑約三仙米ノ柄ヲ有スル大人手拳二倍大ノ腫瘍アリテ餘リ硬固ナラズ表面ニ瘤狀ノ凹凸アリ最表面ハ壞死潰瘍トナリ汚穢灰白乃至黑褐色ノ痂皮ヲ有シ漿液膿性ノ方泌物アリ頗ル異臭アリテ鼻ヲ衝ク周圍ノ陰囊皮膚ハ潮紅浮腫アリ他ニ認ムベキ症候ナシ。

入院セシメ手術セルニ睾丸副睾丸其他ニ異常ナク手術後ノ經過ハ極メテ良好ナリキ腫瘍ノ組織的檢査ニヨレバ定型的大紡錘形細胞肉腫ニシテ臨床上惡性ノ度低クカリシニ一致セリ本症ハ初メ纖維腫ニ近キモノナリシナランガ刺戟其他ニヨリ急速ニ變化シテ肉腫トナリシモノナラント。

（皮膚科教室田中抄）

○黴毒ノ療法ニ於ケル二三ノ注意ニ就テ（上）

（實驗醫報第四年第三十九・四十號）

醫學博士　櫻根孝之進

著効存ストハ云ヘ「ザルワルサン」ノミニ信賴セズ水銀及沃度併用ハ現今ノ驅黴法ナレ共其時期方法尙一定セズ加療中及加療終了後ト雖ドモ度々ワ氏反應ヲ調ベ臨床上ノ所見ヲ加味シテ療法ノ方針ヲ定ム可キナリ、著者ハ皮膚科學會ニテノ松本博士及ビ宮崎學士ノ報告ヲ引例シ黴毒治癒ハ必ズ加療ノ度ニ比例セズ其間ニ遲速難易アリ恐クバ「スピロヘータ」ノ力ノ强弱、「スピロヘータ」ト藥トノ結合ノ强弱、所在ノ關係、病者ノ體力トニ關シ所在トシテ「スピロヘータ」ガ神經系統中ニ存スル時ハ難ニシテ「スイフト、エリス」ノ注射法アルガ如シ、病者ノ體力トシテ强キ人ニハ良効アリ、藥トノ結合關係ハ病者ガ藥ニ習慣性ヲ高メ藥ノ働キヲ鈍ラスカ、或ハ「スピロヘータ」其者ガ藥ニ慣レルカノ二トセリ、エールリッヒ氏ガ「トリパノゾーメン」ヲ培エタ鼠ニ少々宛「アトキシール」ヲ用ヰテ鼠ガ其爲ニ死セシモ「トリパノゾーメン」ハ死セズ之砒素抵抗性ニ歸ス又「サルワルサン」發見當時ボン邊ノ病人屢〻砒素劑ヲ用ヰ居リシ爲著効ヲ見ザリキト、又赤津、野口兩氏ノ藥品抵抗性試驗成績ハ（一）「パリーダ」及「ミクロデンチウム」ハ三―四ケ月後「サルワルサン」及「ネオサルワルサン」ニ五倍半、「レフリーゲンス」凡三倍增シ、（二）昇汞ニハ十週間ノ中「パリダ」凡三十五―七十倍、「ミクロデンチウム」凡十倍、「レフリーゲンス」三十倍ヲ增シ（三）ルゴール氏液ニハ割合ガ低シ、此理ニ依リ賣藥ノ如

キ弱キ藥ヲ常用スレバ不良ニシテ又「サルワルサン」モ○・一ヲ毎日隔日ニ用フルヨリ間歇性ニ尚多量ヲ用ルヲ良トス水銀モ少量宛常ニ内服スルヨリモ間歇性ニ多量ノ注射ヲ可トシ又注射ニ於テハ度々注射ヲ要スル可溶性水銀ヨリモ寧ロ其數ノ少キ不溶性水銀ヲ可トセリ。

○丹毒ニ就テ

（臨床醫學第六年第一號）

和田英太郎

丹毒連鎖狀球菌ト釀膿連鎖狀球菌ト同一ニシテ尚葡萄狀球菌性丹毒ノ存在說ニ同意シ前者ハ後者ヨリ其症狀强シト著者ノ實驗セルハ四十例ニテ男女相半バシ體質中等ノ者ニ多ク二十一―三十歲ニ最多ク一年未滿者之ニ亞ゲリ四月最モ多ク九月三月之ニ次グ一般症狀ヲ述ベテ其蔓延ノ速度一晝夜ニ多クハ十糎ヲ出デズ且速ニテ廣キ者多ク遲クシテ狹キ者之ニ亞ゲリ解熱ハ分利スル事少シ輕症ニシテ再發シ易キ一例及丹毒ヲ惡性腫瘍治療ノ目的ニ接種スルハ甚危險ナリトシ自ラ淋巴肉腫手術後再發ノ治療中丹毒併發シ體力著シク不良トナリ同時ニ局處症狀急ニ增惡シ不幸ノ轉歸ヲ取リシ例ヲ示サル著者ノ賞揚セル療法ハ等分「イヒチオール・ラノリン」塗布亞麻仁油紙貼用其上二%硼酸水罨法時ニヨリテハ之ニ氷罨法ヲ加ル事アリ必要ナキ限リ塗布軟膏ハ放置シ患部ノ刺戟ヲ避ケ病勢其封鎖線ヲ突破スル時ハ更ニ廣ク塗布ス「コルラルゴール」三―五瓩靜脈內注射試ミテ可ナリ著者ハ「クロールシウム」一%液最初三〇―四〇瓩ヲ一回量トシ靜脈內注射シ必要ニ應ジ反復シ一回量六〇―八〇瓩ニ達セリ個人的特異質ニ依ル副作用ハ免レザルモ注射後熱ノ下降スル事多キハ事實ナリ然レドモ一―二三回ノ注射ニテ頓挫セシムル事不能ナリ反復スル時ハ蔓延ヲ抑制シ經過ヲ短縮セシムル効アル如シ然シ四〇―五〇瓩注入スル事四回ニ及ブモ病增進スルニヨリ一旦中止シ丹毒ワクチン」注射ヲ行フヤ忽チ輕快シ二回ニシテ消退セシ例ヲ實驗セリ而シテ氏ハ「クロールカルシウム」靜脈內注射ノ効力如何ハ尚多數ノ症例ニ就テ十分覆査スルニアラザレバ其評價ヲ誤ルコトアルベシト述ベタリ。（以上二件皮膚科教室小出抄）

○黑色表皮腫症例增補

（皮膚科及泌尿器科雜誌第十八卷第一號）

醫學士　西川義方

本病ハ稀有ノ疾患ニシテ西紀一八九〇年ヤノフスキー氏及ポリツェル氏ノ發表セルニ濫觴シ一九一四年迄ニジヤ

ン・ヅ・アジュア氏ハ七十八例ヲ算セリ本邦ニテハ一九〇一年板津氏ノ報告セシヨリ今日マデ僅ニ十例ニ過ギズ氏ハ患者瀬古某女五十一歳ニ就テ家族歴既往症經過現症組織的所見及鑑別診斷等ヲ詳說シ結論トシテ本症ハ老年ニ來レル定型性黑色表皮腫ニシテ臨床上三主徵ヲ具備シ內臟癌腫症贅狀表皮增殖ハ甚ダ屢〻遭逢ス初發部位トシテハ頸項部脉窩ニ多キガ如ク粘膜ノ乳嘴狀增殖ハ屢〻記載サルル所ナルモ其色素沈着ハ白哲人種ノ症例ニハ殆ド皆無ナルガ如キモ本邦症例中比較的屢〻之ヲ見ル自覺症殆ド皆無又ハ輕微ト稱セラルルモ瘙痒ハ頗ル屢〻來リ且强劇ナルコトアリ男女間ニハ大ナル逕庭無ク中年以後ノモノニ多シ皮膚病變トシテハ有棘層增殖該層及眞皮上層ニ於ケル細胞內「メラニン色素顆粒ノ增加乳頭及網狀突起ノ著明ナル肥大延長不規則輕度ノ細胞浸潤及血管擴張並ニ角層肥厚等ニシテ不全角化ヲ認メズ透明層ハ缺如若クハ不明ナリ屢〻顆粒層ノ肥滿增殖ヲ認ムルモノノ如シ。

（皮膚科教室森田抄）

眼科學

○「クロールカルシウム」ノ眼疾患ニ對スル實驗

（中央眼科醫報第十卷第一號）

長谷川俊明

本劑ノ治療上ニ應用サレシハ數年以前ニシテ、其應用ノ範圍ト効果ノ點ニ於テ多少ノ推移ト變動アリシガ、皮膚病ニ對スル効力ハ一般ノ承認ヲ得タリ、即チ急性濕疹、蕁麻疹、皮膚瘙痒症ニ對シテ治癒機轉ヲ促進シ、特ニ丹毒ニ對シテハ特異的ニ作用シ驚嘆スベキ効果ヲ認ムルニ至レリ、近時本療法ノ範圍益〻擴大セラレ滲出性肋膜炎、氣管枝喘息副睾丸炎、橫痃ニ對スル治療効果報告ヲ見、又臨床的治療ト相俟ツテ該劑ノ免疫体ニ及ボス影響、或ハ本劑ガ何故生体ニ好影響ヲ與フルヤノ問題ニ關スル研究的發表ヲ見ルニ至リ本劑ノ治療的價値ハ漸ク闡明セラレントス、獨リ本邦ノ眼科ニ於テハ今日迄該品ノ眼疾患ニ對スル影響ニ關シ何等治驗的研究ノ發表ナシ、依テ著者ハ該劑ヲ適用スベキ眼疾患アルヲ信ジ、初メ本劑ノ著効アル皮膚疾患ト同樣ナル原因的關係アリト思考スベキ二三ノ眼疾患ニ本劑ヲ應用セシニ効果著シキヲ以テ、更ニ大正五年八月ヨリ同六年九月ニ至ル一ケ年間ニ於テ眼疾患總數七十三名（「フリクテーン」五十一人、角膜實質炎八名、上鞏膜炎五人、綠內障六人、結膜結核一人、眼

瞼緣炎二人）ニ就テ治療的研究ヲ試ミ其實驗ヲ左ノ如ク發表セラレタリ。

一、該劑ハ「フリクテーン」ノ多數ニ對シテ其治癒機轉ヲ促進スル者ナルコトヲ確認セリ。殊ニ其十數例ニ於ケル迅速ナル治癒ハ本劑ノ特異的ニ作用セリト云フヲ妨ゲズ、元來「フリクテーン」ハ豫後佳良ナルヲ常トシ殊ニ特効藥トシテ甘汞黃降汞アリ容易ニ治スルヲ得ベシ、而モ尙此言ヲ爲スハ多數ノ症例ニ於テ其經過ノ短時日ト該劑注入ニ依リテ起ル截然タル症狀ノ變化トヲ認メ得レバナリ、「フリクテーン」ノ原因ニ關シテハ兎角ノ議論アリテ尙確然タル歸結ヲ見ルニ至ラズ、氏ハ本劑ノ奏効ガ其間ノ消息ニ關シ多少ノ興味アルヲ信ズル者ナリ。

二、結膜結核、非黴毒性角膜實質炎ニ對シテハ例症少ナカリシモ特ニ好影響ヲ與フルコト能ハズト見做スベキ者ナラン。

三、上鞏膜炎ニ對シテハ稍著明ナル効果ヲ顯ハシタル者アルモ僅少ナル治驗ナルヲ以テ直ニ該劑ノ確實ナル効果ト斷言スルヲ憚カル。

四、綠內障ニ就キテハ氏ハ其症狀ノ輕減シタル者ニ於テハ恐ラク該劑ノ効果ニ負フベキ者ナラント思惟ス。

要スルニ該劑ハ眼疾患ニ對シ多大ノ若シクハ幾多ノ影響ヲ與フル者ニシテ、其治療上ノ價値及ビ其適當ナル使用量ニ關シテハ尙今後ノ研究ニ俟ツベキ者ナリ、氏ノ使用セシハ化學的純粹品（$CaCl_2$）ニシテ大多數ハ靜脈內注入ヲ應用シ小數例ハ內服セシメタリ、內服ハ二・%—三・%一〇〇・〇ヲ一日三回、注入ハ一・%液大人ハ六〇・—一〇〇・女子ハ五〇・—七〇・〇ヲ一回量トシ隔日或ハ每日使用セリ。

（眼科學教室加藤抄）

雜報

●私立衛生會石川支會評議員會　大日本私立衛生會石川支會にては去月十三日午後二時より警察部に於て評議員會を開き大正七年度豫算に付き協議したる結果金千九百八拾七圓を可決したり、而して本年度に於ける新事業としては金五拾圓を以て本年夏期家庭衛生講習會を開催し主として主婦の衛生思想啓發に努め又金九拾圓を以て表彰費に當て縣下各郡市青年團中壯丁檢査の際最も好成績なりし團體に金拾圓宛を贈與することせり、尙仝會本年度總會は七月下旬の頃能登輪島町に於て開催する事に決定せりと。

●第二十回金澤皮膚科集談會　大正七年二月十二日大手町醫師會堂に於て開催左記の講演ありたり。

一、痒疹ニ併發セル惡性黴毒ニ就テ　田中清次氏

二、顏面播種狀栗粒樣狼瘡ノ一例　森田隼三氏
三、稀有ノ經過ヲ取リシ丹毒ノ一例　山田孝太郎氏
四、非淋毒性尿道炎ニ就テ　土肥章司氏

●第四十八回金澤病院醫事集談會例會　二月廿一日午後一時より眼科教室に於て開催、左記の講演ありたり。

一、知覺障害ヲ主トセル腦溢血症（患者供覽）　松原部長
二、汗孔角化症ニ就テ　土肥部長
質問、宮田部長
三、不整脈ニ就テ（脈波供覽）　田村部長

校內消息

●紀元節拜賀式　去る二月十一日午前九時より大講堂に於て拜賀式擧行せらる、恒例により定刻職員生徒入場し、御眞影に對し一同最敬禮を行ひたる後高安校長は謹んで賀詞を述べられ次で垂帳の後再び全校長は恭しく教育勅語及御沙汰書を奉讀せられ、終りに一同我大日本帝國の萬歲を三唱して十時解式せられたり。

●本學年試驗　本校醫學科各學年に對し共に去月廿七日より學年試驗を施行し本月九日終了の筈なり。

●海軍省醫務局員の本校視察　海軍省醫務局員海軍々醫少監伏島忠雄氏は去月二十二日本校に來り我海軍々醫學生に對し在學中及將來に付き訓諭する所あり終りて本校各教室及金澤病院を視察せり。

●林教授學位受領祝賀會決算報告　左記の如し。

收入之部

金七拾五圓五拾錢	來賓會費
金四拾八圓五拾錢	醫科一年級諸君
金四拾六圓五拾錢	仝　二年級諸君
金四拾參圓五拾錢	仝　三年級諸君
金四拾圓五拾錢	仝　四年級諸君

合計金貳百五拾四圓五拾錢也

支出之部

金七拾九圓拾錢	菓子費
金參拾參圓五拾錢	餘興費
金參拾壹圓五拾錢	林博士肖像額面二葉及附屬品
金四圓五拾錢	生花及徽章
金四圓五拾貳錢	通信及廣告費
金壹圓五拾錢	小使慰勞費
金參圓七拾五錢	諸雜費
金九拾六圓拾參錢	紀念書棚及附屬品（但目下注文中現金預金）

合計金貳百五拾四圓五拾錢也

大正七年二月　委員總代

會報

●講話部例會記事

期日　大正七年二月二日午後一時
會場　大講堂

灰色の冬の北國には稀有の好天氣、各教授、特別會員、學生の聽衆多し、

校外講師として第四高等學校教授市村塘氏、第九師團參謀長奥野大佐殿の講演もあり例會としては稀なる盛會なりき。

講演順序左の如し。

一、開會の辭　　須藤部長

一、最善の行程　　醫一　瀨戸山三郎君

君は最善の道を辿りて意義ある人生をむくらんには宗教によらざるべからずとなし、種々の例証を擧げて熱心に力説せられたり。

一、小さき胸の叫び　　醫三　近藤政義君

君は一昨年の夏季休業、昨年の春季休業を利用して、岡山醫專、高松病院、大阪の緒方病院、仝赤十字病院、京都府醫專、京都大學、横須賀海軍病院、千葉醫專、函館病院等を見學せられた。病院の設備等につきては未だ臨床の智識乏しければ斷定し難きも、本校基礎學科の設備に於ては他校を凌ぐ所大ならんと述べられ、最後に我が金澤病院の附屬病院たらむことを希望すと結ぶ。

一、希望及所感　　醫四　竹中和一君

君は主として本校運動會の廢止につきて力説せらる。この論は爾來明全會に於て研究せられたる宿論にして一般聽衆の同意を得たるもの丶如し。

一、希望及所感　　醫四　上出成之君

君も亦主として本校運動會廢止を力説せられ、これに更ふるに四年生の修學旅行、衛生展覽會を以てすべしと結べり。

一、研究報告二件　　四高教授　市村塘氏

（イ）、火傷菌

（ロ）、箆麻雜種

火傷菌並に其中毒例を述べられ、實物標本及該蠟製標本を示された。詳細は本年二月の本誌を見よ。又箆麻雜種に付ての研究報告は「メンデル法則に一例証を與へられたるもの丶如く、圖畫及實物を示されたり。

一、奮鬪　　醫一　上坂鵬太郎君

君は人生の意義は一に奮鬪二にも奮鬪なることを熱心に説述せられたり。

一、所感　　醫四　仲井芳雄君

君は運動會廢止に對して竹中、上出両君と論議一致し、更に具体的數字を掲げて論ぜられたり。

一、悠々たる修養　　醫一　田中靜雄君

人は何事をなすに當りても殿さして惑はざる悠々たる修養を要すと、又運動會廢止論に一大痛棒を加へられたるも、その論ずる處、餘りに空茫なりしを憾む。

一、現下ノ大勢ト國民ノ覺悟　　第九師團參謀長　奥野大佐殿

現今世界に於ける獨立國は四十八にしてその内白人の國は三十八を數ふれども有色人種か主宰するものは僅に十に過ぎず、而して過去五十年間に於ては十ケの獨立國亡び、今は入國少數主義を實現せんとす、過去の歴史より推論せは今後五十年にして日本帝國を餘すの外有色人の國家は悉く滅亡せんとも限らず、つら〳〵惟るに人種的の競爭日に盛にして、又歴史は多數の例証を與ふ、即ち我大日本帝國は必ずや世界と相對して競爭せざるべからざる時期の來るべきことを推定するに難からず、而して大和民族の數を六十万とすれば世界人口の約三十一分の一に相當す此故に一朝有事の秋に當りては一人の日本人は能く三十人の敵に當らざるべからず、從て豫め大なる覺悟と準備とを要す。士農工商、官民庶民を問はず上下擧つて奮戰力鬪せざるべからざるや勿論なり。此目的を達するには第一に皇室中心思想を皷吹せざるべからず、蓋し建國の歴史耀々

たるものあればなり、諸君自重して惑はざるゝなかれと。

一、閉會の辭　　須藤部長

二月五日(火曜日)市内工業學校に於て演説大會開催せらる。他我辯士及演題は左の如し。

一、人類の醫學的欠陥の一二　　醫專　仲井芳雄君
一、Age and Character　　商業　松永昇雄君
一、名工山田宗美氏　　小中　澤枝他市君
一、移り行く時代思潮　　二中　宇野次作君
一、戰爭と平和　　一中　村田廣君
一、我國の將來と我等の「ベスト」　　師範　高島敬次君
一、人生と努力　　四高　竹村重武君

聽衆約三百盛會なりき。

●遠足部記事

第四回遠足。　大正六年九月廿四日、日曜、我が遠足部は遊泉寺銅山の遊覽を企てたり。二番上り列車にて金澤を發して小松にて下車して遊泉寺鑛山に向ふ。天高く氣朗にして愉快に相談しつゝ正午近く遊泉寺銅山に着す。晝食後一行鑛山の技師に案内せられて精錬場を一覽せり。得る所少からず。かくて午後二時頃此處を發して山を超ねて辰ノ口に出づ今まで晴れたる空は忽ち黑雲を以て蔽はれ、夕立盛に降り來れり一行中雨具を用意する者少く其困苦云ふべくもあらず。大急行して辰ノ口を過ぎ鶴來に出で大抵汽車を利用して歸澤せり。本日遊泉寺銅山遊覽等に關し本校出身の先輩窪田氏の種々便宜を與へられたるは我等深く感謝する所なり。

第五回遠足。　大正六年十月十四日、日曜、午前七時地黃煎町東端に集合して鶴來往來より額谷に至り之より倉ヶ岳に登る、一里許り登れば倉ヶ岳村あり。之より坂頗る急なり勇氣を鼓して一氣に登り極む。山甚だ高きにあらざれども、越中及加賀の平野を一眸の裡に集め、其眺望思はず快哉を叫ばしむ。山頂の傍に池あり嘗て富樫左衛門が此處に身を投じ大蛇と化し年中水涸れずと言傳ふ。時恰も池水少くして蛇の住めるとも思はれずかくて山を降る額谷村に至れば既に松茸飯會の準備整へり。空腹の所なれば皆競うて食ふ。それより隨意解散して歸途に就く。

第六回遠足。　大正六年十月二十八日、日曜、朝來雨降りに降る。かくも甚だしき雨を臆せず午前八時本校門前に集る者二十名。皆元氣を鼓舞して二俣往來を辿る。天我等の意氣に感じてか雨次第に細微となり四方の遠近の山岳雲を破りてあらはる。殊に醫王山の雄姿は眼前に迫る。既にして午前十一時過二俣村に着す。此處にて有名なる蓮如上人の古蹟を訪ぬ。午後一時頃此處を發して森本川に沿うて下る。暫時にして小高き山あり。折しも雨は篠をついて降る。一行の勇氣は少しも怯むことなし。この山を超ゆれば即ち原野なり之より福光森本往來に出で午後三時深谷鑛泉に着す。此處にて一浴後愉快に晩餐を喫して歸途に就く。此時幸にも雨全く霽れ皆心地よけに或は歌ひ或は嘯きて、午後七時過金澤に歸る。此行雨烈しかりしも其中にまた特殊の愉快を感ぜしことは、他の遠足に得たるよりも優るとも劣るまじ。嗚呼天候何ぞ恐るゝに足らん。

第七回遠足。　大正六年十一月廿五日、日曜、連日來の雨本日に至りて全く霽れたり。我が遠足部主催の山中地方大遠足に好日和なりとて、金澤停車場に集る者九十有餘名。やがて上り二番列車に乘じ、忽ち松任美川を過ぎ、小松にて下車して、北陸街道を進む。此時天氣快晴更に一点の雲もなく遠近の山岳は紅葉又黃葉を以て飾られ心地よきこと限りなし。瞬く間に動橋に至る。此處にて晝飯を喫し、又進むこと一里許にして山代に至り、

各自々由に山代を見物しつゝ午後三時過相前後して山中に達せり。先づ疲勞を癒すべく溫泉へと急ぐ。浴後各自縱に山中の名所を探る。蟋蟀橋の秋景實に此地方稀に見る所にして思はず快哉を叫ばしむ。又黑谷の流も淸くして頗る雅致あり。藥師堂に至れば將に沒せんとする夕陽は楓を照して古人が「霜葉紅於二月花」の趣を味ふに足る。此處にて瞰下すれば山中溫泉場は一眸の中に集る。かくて宿に歸りて晩餐を終へて一行の者皆吉野屋旅館の一室に會し茶話會を開く。先づ宮田敎授より遠足に關する話ありたり、次に須藤敎授より溫泉に關して有益なる講話を拜聽しぬ。殊に山代溫泉の湯元の湯にて鷄卵の半熟となるは地方人の所謂湯の成分に依るとにはあらずして其溫度の然らしむる所なること、それに就きて前日試みられたる鷄卵の實驗を証として、懇々と說明せられたるは吾等に於て何より光榮謹んで深く感謝する所なり。かくて九時頃散會せり。

十一月廿六日、日曜、一行は午前八時山中を發して十一時頃那谷寺に着す。那谷寺は北陸第一の紅葉の名所たり。岩石は槎枒として聳立し其間に紅楓を交へ淸澈鏡の如き池水に其影を映す。折しも先刻來降りしきりし雨漸くやみ日光は雲間を洩れて之に映ず。其美しさ實に筆舌に盡す能はず。此處にて晝飯を食ふ。之より細雨來りてはやみ、やみては降る。かくて或は電車に乘りて粟津に至るもあれば、或は元氣を鼓して歩くもありて、一行豫定の如く皆小松停車場に集合せり。四時二十八分發の汽車に乘りて此樂しかりし遠足の歸途に就きぬ、金澤停車場にて宮田先生の發聲にて遠足部萬歲を唱へて解散せり。此遠足は實に愉快にして而も有益なる智識を得たること影し。これぞ他日の樂しき思出の一つとなるならん。

●十全會両毛支部會

吾が阿毛の地は從來地理的關係上母校出身の開業者僅に十數名に過ぎず誠に寥々として揮はざる歲久しく候へと此儘同窓會合の機なく徒らに推移するは只に寂莫を感ずるのみならず實に將來の發展上寒心に不堪依て同志相謀り過般恩師松浦先生の謝恩並に同窓西君の榮轉祝賀を兼ね當佐野町久內樓に第一回懇親會開催仕り候

當日會する者主賓共僅に九名に過ぎず候も惟ふに當地方に於て斯く比較的多數會合せられたるは開催地が両毛線中央驛とは申せ蓋し空前の事に候尙爾今の會合は少くも年一回以上となし次會は日光、伊香保何れかの勝地を撰び盛に開催することに略〻決定致し置き候、會員左の通り。

栃木縣立宇都宮病院長　恩師　松浦龜太郎先生
防疫官補（沖繩縣技師トシテ不日赴任ノ筈）　西　勝人君（四三）
前橋市北川病院長（外科專門）　北川光雄君（三九）
伊勢崎町開業（內科專門）　美原文二君（四三）
栃木縣那須郡上江川（一般開業）　關根平君（四三）
宇都宮病院在勤（眼科主任）　久高唯忠君（四三）
仝（藥局長）　瀧澤忠一郎君（四一）
栃木縣田沼町（一般開業）　山口登君（四三）
仝　佐野町（內科專門）　茂居政治君（三九）

以上

叙任及辭令

●陸軍省

（一月廿三日）

滿洲へ出張被仰付　陸軍二等軍醫正　橋本監次郎

●石川縣

（一月廿四日）

金澤病院醫員ヲ命ズ　十二級俸給與　村上正德（大正六）

外科第二部及耳鼻咽喉科勤務ヲ命ズ

（二月一日）

依願職務ヲ免ズ　金澤病院醫員　波々伯部重隆（大正二）

（二月九日）

金澤醫學專門學校教授　加藤直三郎

金澤病院調劑部長ヲ囑託ス

年手當貳百圓給與

（二月二十日）

金澤病院醫員ヲ命ズ　十二級俸給與　紺田孫助（大正六）

產科及婦人科勤務ヲ命ズ

人事

●山元文吾氏（大正六）　內科研究生として在學中なりしが今回北海道夕張炭鑛瀛船株式會社附屬病院の聘に應じ赴任。

●岡山三郎氏（仝）　神奈川縣臨時防疫官として赴任せられたる仝氏は小田原幸町二丁目湯川方に寓居せらる。

●吉井康治郎氏（三六）　歩兵第四十聯隊附陸軍三等軍醫正なる仝氏は去月一日より上長官學生として陸軍々醫學校へ入學を命ぜらる。

●太田長作氏（三五）　歩兵第三十二聯隊附仝上。

●松村魁氏（仝）　歩兵第二十一聯隊附仝上。

●久保武氏（三一）　京城醫學專門學校解剖學教授たる仝氏は今般京城大和町三丁目六番地へ轉居せられる。

●波々伯部重隆氏（大正二）　金澤病院產科婦人科部醫員として勤務たりしが今回富山縣射水郡伏木町長谷川病院婦人科部長として山本學士の後を襲ふて赴任せられたり。

●黑田末次氏（大正四）　金澤病院內科第二部醫員たりし氏は昨冬來病氣加療中なりしが去月十八日不幸にして不歸の客とならるる茲に謹んで哀悼の意を表す。

●前川孝之氏（大正三）　卒業後金澤市立櫻木病院醫員を奉職し次で昨年より京都醫科大學に於て研究中の處偶ま病を得歸鄉金澤病院に入院療養中なりしが藥石其効を奏せず終に去月廿三日死去せらる、茲に謹んで弔意を表す。